古文の窓❹ 真名と仮名

教材のねらい

『土佐日記』や『竹取物語』、『伊勢物語』などの作品は、平安時代の「仮名文学」と呼ばれる。この単元で学習した『土佐日記』は、「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」という宣言に基づく、仮名による日記の試みである（当時の「男もすなる日記」は、藤原道長の『御堂関白記』や藤原実資の『小右記』などのように漢文日記だった）。「阿倍仲麻呂」の段には仲麻呂の歌意を唐土の人に漢字で示して理解し合う場面があるなど、『土佐日記』は文字表記に意識的な作品である。新しい学習指導要領では「伝統的な言語文化」を学ぶことも立項されており、「古文の窓」では教材の読解を受けて日記が綴られた文字に着目し、生徒が日本語の文字の由来を学びつつ、その豊かさに気づき理解を深めることをねらいとする。

解説

教科書で読む「仮名文学」は、実際には読みやすいように適宜漢字をあてた「漢字仮名交じり文」であり、文字も変体仮名を用いたくずし字でなく、楷書で書かれている。「仮名文学」は文学ジャンルの名称としてのみ認識されがちで、今日の活字テキストから表記としての「仮名」を意識することは少ないかもしれない。なお、変体仮名とは、「現在、普通にひろく使用されるものと異なった字体のひらがな。特に明治三三年（一九〇〇）小学校令施行規則で採用されたひらがなと比べて、字源またはくずし方を異にするかな」（『日本国語大辞典』）を言う。

「漢字」と「仮名」の関係は、「古文の窓」の標題に掲げたように、「真名（まな）」と「仮名」の関係にあったことが重要である。すなわち、「仮名」は「真名」に対する「かりそめの文字」であり、「仮名文学」はそのかりそめの文字で書かれた文学であるという側面を持つ。文字の選択は公・私の領域や、八十一頁で橋本治氏が指摘する当時の「男の文章と女の文章」の問題にも関わる。『土佐日記』には「漢詩（からうた）はこれにえ書かず」という一文があるが、「真名」で書かれた詩が避けられているのは、女性（実は作者は紀貫之）が「仮名」で書いた日記という設定ゆえである。その枠組みは後の『源氏物語』にも引き継がれていると考えてよかろう。『大鏡』の「三船の才」の逸話なども思い起こされる。この「古文の窓」をきっかけに、生徒には「仮名文学」の「仮名」、および日本の文字の歴史について関心を持ってほしい。

『土佐日記』が「仮名文学」であることを実感するには、「変体仮名」を学習するとよい。仮名が漢字から作られたことは小学校でも学ぶはずだが、それぞれの仮名がどの漢字から作られたかを言い当てることは案外難しいし、ふだんの生活でそれを確かめる場面にはあまり出くわさない。「寸」から「す」、「乃」から「の」が作られたことは字形から察しがつきやすいが、「た」が「太」、「ひ」が「比」、「み」が「美」から作られていることなどは今日の活字書体からはなかなか想像しにくいのではなかろうか。加え

て、「は」の字母の一つに「者」があり、八十三頁の看板図版にも用いられているが、これは音読みの「シャ」や訓読みの「もの」ではなく漢文の置き字として読むときの「は」に基づく。そういった歴史に触れることで、私達がふだん使っている文字のあゆみをかいま見ることができるし、東アジアの漢字文化圏の中で日本文学をとらえ直す契機にもなるだろう。

　変体仮名の学習と言えば、仮名字体表や活字テキストと見比べながら写本・板本（版本）の複写を読み進めるというのが典型的なスタイルであろうが、近年になって学習用のスマートフォンのアプリも開発された。二〇一五年に早稲田大学とカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）により共同開発された「変体仮名あぷり」や、翌年大阪大学を中心に開発されたくずし字学習アプリ「KuLA」が知られる。日本古典文学を学ぶ大学生も行き帰りの電車などでトレーニングに励んでいると聞く。そういったアプリを活用した新しい学習法も授業の中で紹介したい。古典研究を志す者に限らず、幅広い関心から気軽に変体仮名に接しやすくなったという点で大きな意義があると言えよう。

　変体仮名・くずし字で書かれた書物を読むこととその環境についても述べておきたい。

　この単元で学習した『土佐日記』の冒頭は嘉禎二年（一二三六）の藤原為家自筆写本の写真が「単元の言語活動５」（八四ページ）に載っているが、変体仮名を学習することでこのような書物の元の姿に接することができるようになる。国文学研究資料館の「国文学研究資料館「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」や、資料を所蔵する各機関により、古典籍のデジタル公開が進んでいる。

　古典籍を変体仮名・くずし字で読めるようになることについて、中野三敏氏は「和本リテラシー」の回復を提言した。『和本のすすめ―江戸を読み解くために』には以下の一節がある。

　和本リテラシーとはやや大げさな言いようだが、平たく言えば変体仮名と草書体漢字、いわゆる「くずし字」の読解能力を言う。明治以前はほとんどそれしかなかった文字表現であり、我々の父親世代（明治生まれ）までの読書人は、なお辛うじて持ち続けていたに違いない能力である。では平成の現時点ではどうか。語学・文学・歴史の分野で江戸以前を専攻する研究者、及びその卵を基盤として、おそらく三千人、その他多く見つもっても五千人には届くまい。総人口の〇・〇〇四パーセントということになる。一方、日本の読書人で古典を不必要と言い切れる人はおそらくあるまい。今、その人たちのほとんどが〇〇文庫、〇〇叢書の活字本によってそれを愛読する。そしておそらくその内の大多数の人は、必要な古典はほとんど既に活字化されているものと御考えなのではなかろうか。無論それが事実であるならば、和本リテラシーなど今さら不必要とされても当然である。では、明治以前に出来た和本の総点数はどれほどあるものか。一つの手懸りであるが、有名な『国書総目録』全八巻の収録点数は約五十万点という、加えるに、私などの貧弱な経験から勘案しても、『国書』未収録の和本はやはり五十万点はあろう。合わせて百万点を超すというのが妥当な数ではなかろうか（これでもかなり内輪な計数のつもりである）。その内容はおよそ人智

のあらん限りのものが書物化されていよう。それは全方位的に存在し、形而上から形而下まで、あらゆる領域に及ぶ。さて、その中のどれほどが活字化されているのだろうか。それは文芸作品から生活文化のあらゆる領域に至るまでを見つもっても、とても一万点を超すとは思われない。とすれば、活字化されたものは総数のわずか一パーセントにも満たぬことになる。

変体仮名・くずし字の読解ツールとして、ＡＩの活用が始まっていることも紹介しておこう。たとえば、人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）により「くずし字ＯＣＲ」が開発され、活字テキストと同じ要領での読み取りが目指されている。「みを（miwo）―ＡＩくずし字認識アプリ」や「デジタル源氏物語」のように、その能力を活用した研究ツールや教材も生まれつつある。古典の分野においても今後は人間とＡＩの協働といった場面が増えてゆくことだろう。

参考

・笠間書院叢刊刊行会『字典かな―出典明記』（改訂版）笠間書院、一九八八年。
・児玉幸多『くずし字用例辞典』（普及版）東京堂出版、一九九三年。
・小松茂美『かな―その成立と変遷』岩波新書、一九六八年。
・中野三敏『和本のすすめ―江戸を読み解くために』岩波新書、二〇一一年。
・マイケル・エメリック「変体仮名あぷり」『てんてこまい―文学は日暮れて道遠し』五柳書院、二〇一八年。
・川添愛『言語学バーリ・トゥード―ＡＩは「絶対に押すなよ」を理解できるか』東京大学出版会、二〇二一年。
・「変体仮名あぷり」
https://apps.apple.com/jp/app/変体仮名あぷり/id1053735914
・「くずし字学習支援アプリ　KuLA」
https://kula.honkoku.org/
・「みを（miwo）」
http://codh.rois.ac.jp/miwo/
・「デジタル源氏物語」
https://genji.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/